古文単語 現代語訳の誤りを直す ①

高校／印のついた訳を、本文に合う意味に直す

名前 _____

日付 _____

各問に原文と訳があり、訳の――線の部分は古語の意味の取り違えです（誤りはこの1か所だけ）。
その問の原文の中で古語の意味を決め、――線の部分の正しい訳を「正しい訳」の欄に書きなさい。
原因は「原因」の欄に記号で答える。ア＝現代語の意味のまま訳した　イ＝その語の別の意味を選んだ

1 原文　すさまじき物にして見る人もなき月の、寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心ぼそきものなれ。（徒然草・第十九段）

訳　ものすごいものとして見る人もいない月が、寒々と澄んでいる二十日あまりの空は、心細く感じられるものだ。

正しい訳	原因

2 原文　花橘は名にこそおへれ、なほ梅のにほひにぞ、いにしへの事も立ちかへり恋しう思ひ出でらるる。（徒然草・第十九段）

訳　花橘は名で知られているが、やはり梅の美しい色つやによって、昔のことも立ち返って恋しく思い出される。

正しい訳	原因

3 原文　さるべきゆゑありとも、法師は人にうとくてありなむ。（徒然草・第七十六段）

訳　そうなる運命の理由があっても、法師は人と疎遠でいるのがよいだろう。

正しい訳	原因

4 原文　花のもとには、ねぢより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては大きなる枝心なく折り取りぬ。（徒然草・第百三十七段）

訳　花の下では、にじり寄ったり立ち寄ったりして、よそ見もせずに守って、酒を飲み、連歌をして、しまいには大きな枝を無分別に折り取ってしまう。

正しい訳	原因

5 原文　鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る数おほかる日はあれど、送らぬ日はなし。（徒然草・第百三十七段）

訳　鳥部野、舟岡、避けられない野山にも、死者を送る数が多い日はあるが、送らない日はない。

正しい訳	原因

6 原文　あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。（徒然草・第百五十七段）

訳　あからさまに聖教の一句を見ると、なんとなく前後の文も目に入る。

正しい訳	原因

いちごドリル プリント

つづきの無料プリント
「古文単語プリント」のプリント一覧がひらきます

古文単語 現代語訳の誤りを直す ②

高校／訳のどこが、なぜ違うかを見つけて直す

名前 _____

日付 _____

訳には、古語の意味の取り違えが1か所あります（誤りが無い訳も1つあります）。
訳から書き抜いて「誤りの語句」の欄に、正しい訳を「正しい訳」の欄に書く。
誤りが無ければ「誤りの語句」と「原因」の欄に「なし」と書く（「正しい訳」は空ける）。
原因は「原因」の欄に記号で答える。ア＝現代語の意味のまま訳した　イ＝その語の別の意味を選んだ

1 原文　冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。（枕草子・第一段）
訳　冬は努力するのがよい。雪が降っているのは言うまでもない。

誤りの語句	正しい訳	原因

2 原文　やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。（徒然草・第三十二段）
訳　まもなく掛け金をかけて奥にこもってしまったならば、残念だっただろう。

誤りの語句	正しい訳	原因

3 原文　はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方がた、めざましきものにおとしめ嫉みたまふ。（源氏物語・桐壺）
訳　はじめから自分こそはと自負していらっしゃった方々は、この方をすばらしい者としてさげすみ、ねたみなさる。

誤りの語句	正しい訳	原因

4 原文　「我こそ死なめ。」とて、泣きののしることいと堪へがたげなり。（竹取物語）
訳　「私のほうこそ死んでしまおう」と言って、泣いて悪口を言う様子は、とても耐えがたそうである。

誤りの語句	正しい訳	原因

5 原文　つれづれなるままに、日ぐらし硯に向ひて、心にうつりゆくよしなしごとを（徒然草・序段）
訳　することがなく退屈なのにまかせて、一日中硯に向かって、心に浮かんでは消えてゆくとりとめもないことを

誤りの語句	正しい訳	原因

6 原文　いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。（源氏物語・桐壺）
訳　どの帝の御代であったか、女御や更衣がたくさんお仕えしていらっしゃった中に、それほど高貴な身分ではない方で、際立って胸をときめかせていらっしゃる方がいた。

誤りの語句	正しい訳	原因

7 原文　花紅葉のおもひも皆忘れて、悲しくいみじく思ひなげかるれど、いかがはせむ。（更級日記）
訳　花や紅葉を楽しむ思いもすっかり忘れて、悲しくすばらしく嘆くけれど、どうしようもない。

誤りの語句	正しい訳	原因

8 原文　ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。（枕草子・第一段）
訳　ただ一つ二つなどと、かすかに光って飛んでいくのもこっけいだ。

誤りの語句	正しい訳	原因

いちごドリル プリント

つづきの無料プリント
「古文単語プリント」のプリント一覧がひらきます

古文単語 現代語訳の誤りを直す ③

高校／正しく訳した古語に迷わず、誤りを1か所に絞る

名前 _____

日付 _____

各問に原文と訳が1つずつあり、訳には古語が何語も訳してあります。
意味の取り違えは1か所だけ。誤りが無い訳も1つあり、そのときは全部の古語が正しい。
訳から誤りの語句だけを短く書き抜いて「誤りの語句」の欄に、正しい訳を「正しい訳」の欄に書く。
誤りが無ければ「誤りの語句」と「原因」の欄に「なし」と書く（「正しい訳」は空ける）。
原因は「原因」の欄に記号で答える。ア＝現代語の意味のまま訳した　イ＝その語の別の意味を選んだ

1 原文　……ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも、忌ま忌ましうかたじけなくなむ」とのたまふ。（源氏物語・桐壺）

訳　……すばらしい身でございますので、このようにいらっしゃるのも、縁起が悪く恐れ多い」とおっしゃる。

誤りの語句	正しい訳	原因

2 原文　かぐや姫のいふやう、「親ののたまふことを、ひたぶるにいなび申さんことのいとほしさに、得難きものを、かくあさましくもてくること」をねたく思ひ、翁は閨の内しつらひなどす。（竹取物語）

訳　かぐや姫が言うには、「親がおっしゃることを、一途にお断り申し上げるのが気の毒で、手に入れにくい物を、このように驚くほど持ってくること」をねたましく思い、翁は寝室の中の準備などをする。

誤りの語句	正しい訳	原因

3 原文　……唐めいたる装ひはうるはしうこそありけめ、なつかしううらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。（源氏物語・桐壺）

訳　……（楊貴妃の）唐風の装いは親しかっただろうが、（更衣の）親しみやすくかわいらしかったご様子を思い出されると、花の色にも鳥の声にもなぞらえるすべがない。

誤りの語句	正しい訳	原因

4 原文　……なべてほだし多かる人の、よろづに諂ひ、望み深きを見て、無下に思ひくたすは、僻事なり。（徒然草・第百四十二段）

訳　……一般に係累の多い人が、何事にもへつらい、望みの深いのを見て、むやみに見下すのは、まちがいである。

誤りの語句	正しい訳	原因

5 原文　わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続けば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。（源氏物語・桐壺）

訳　わざと行う御学問はもちろんのこと、琴や笛の音を宮中にまで響かせ、すべて言い続けると、大げさで、いやな感じになってしまいそうな御様子であった。

誤りの語句	正しい訳	原因

いちごドリル プリント

つづきの無料プリント
「古文単語プリント」のプリント一覧がひらきます

古文単語 現代語訳の誤りを直す ④

高校／敬語・打消の取り違えにも気づいて直す

名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿

日付 ＿＿＿＿＿＿＿＿

各問に原文と訳が1つずつあり、訳には意味の取り違えが1か所あります（誤りが無い訳も1つ）。
訳から誤りの語句だけを短く書き抜いて「誤りの語句」の欄に、正しい訳を「正しい訳」の欄に書く。
誤りが無ければ「誤りの語句」と「原因」の欄に「なし」と書く（「正しい訳」は空ける）。
原因は「原因」の欄に記号で答える。ア＝現代語の意味のまま訳した　イ＝その語の別の意味を選んだ
ウ＝尊敬と謙譲を取り違えた　エ＝打消（〜ない）を落とした・見落とした

1 原文　手の悪き人の、憚らず文かきちらすはよし。見苦しとて人に書かするはうるさし。（徒然草・第三十五段）

訳　字の下手な人が、遠慮せず手紙を書き散らすのはよい。見苦しいからといって人に書かせるのは騒がしい。

誤りの語句	正しい訳	原因

2 原文　灌仏のころ、祭のころ、若葉の梢すずしげに繁りゆくほどこそ、世のあはれも人の恋しさもまされと、人のおほせられしこそ、実にさるものなれ。（徒然草・第十九段）

訳　灌仏会の頃、祭の頃、若葉の梢が涼しそうに茂っていく頃は、世のしみじみとした趣も人の恋しさもまさると、ある人が申し上げたのは、実にそのとおりである。

誤りの語句	正しい訳	原因

3 原文　……太秦にこもりたるに、宮にかたらひ聞ゆる人の御許より文ある。（更級日記）

訳　……太秦にこもっていたところ、宮に説得し申し上げる人のもとから手紙が来る。

誤りの語句	正しい訳	原因

4 原文　たとへば碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小をすて大につくが如し。（徒然草・第百八十八段）

訳　たとえば碁を打つ人が、一手もむだにして、人に先んじて、小を捨てて大につくようなものだ。

誤りの語句	正しい訳	原因

5 原文　久我の相国は、殿上にて水を召しけるに、……（徒然草・第百段）

訳　久我の相国は、殿上の間で水をいただいたところ、……

誤りの語句	正しい訳	原因

6 原文　大社を遷して、めでたく造れり。（徒然草・第二百三十六段）

訳　大社をうつして、すばらしく造ってある。

誤りの語句	正しい訳	原因

7 原文　我子の仏変化の人と申しながら、ここら大さまで養ひ奉る志おろかならず。（竹取物語）

訳　我が子は仏の化身の人と申しますが、これほど大きくなるまでお育て申し上げた私の志は、いいかげんである。

誤りの語句	正しい訳	原因

いちごドリル プリント

つづきの無料プリント
「古文単語プリント」のプリント一覧がひらきます

古文単語 現代語訳の誤りを直す ⑤

高校／自分の訳を書いてから、訳を点検する

名前 _____

日付 _____

先に、原文の――線の古語2つの意味を短く、原文の下の「自分の訳」の2つの欄に書く（訳はまだ読まない）。
そのあと訳を読む。訳には意味の取り違えが1か所あります（誤りが無い訳も1つあります）。
訳から誤りの語句を書き抜いて「誤りの語句」の欄に、正しい訳を「正しい訳」の欄に書く。
誤りが無ければ「誤りの語句」と「原因」の欄に「なし」と書く（「正しい訳」は空ける）。
原因は「原因」の欄に記号で答える。ア＝現代語の意味のまま訳した　イ＝その語の別の意味を選んだ

1 原文　神楽こそなまめかしく面白けれ。（徒然草・第十六段）

自分の訳（1つ目）	自分の訳（2つ目）

訳　神楽こそ色っぽく趣深いものである。

誤りの語句	正しい訳	原因

2 原文　人のけしきも、夜の火影ぞよきはよく、物いひたる声も、暗くて聞きたる、用意ある、心憎し。（徒然草・第百九十一段）

自分の訳（1つ目）	自分の訳（2つ目）

訳　人の様子も、夜の灯火の光でこそよいものはよく見え、話す声も、暗がりで聞いているのは、気配りがあって、奥ゆかしい。

誤りの語句	正しい訳	原因

3 原文　月の隈なくあかからむも、はしたなくまばゆかりぬべかりけり。（更級日記）

自分の訳（1つ目）	自分の訳（2つ目）

訳　月が隅々まで明るいのも、そっけなく恥ずかしくなるに違いなかった。

誤りの語句	正しい訳	原因

4 原文　あやしの賤山がつの所作も、いひ出づれば面白く、恐ろしき猪も、臥猪の床といへばやさしくなりぬ。（徒然草・第十四段）

自分の訳（1つ目）	自分の訳（2つ目）

訳　身分の低い山里の人の仕事も、話に出して言えば趣深く、恐ろしい猪も、「臥猪の床」と言うと優しくなる。

誤りの語句	正しい訳	原因

5 原文　かしこき御蔭をば頼みきこえながら、落としめ疵を求めたまふ人は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。（源氏物語・桐壺）

自分の訳（1つ目）	自分の訳（2つ目）

訳　恐れ多いお引き立てを頼りに申し上げながら、さげすんで欠点を探しなさる人は多く、わが身は弱々しくちょっとしたありさまで、かえって物思いをなさる。

誤りの語句	正しい訳	原因

いちごドリル プリント

つづきの無料プリント
「古文単語プリント」のプリント一覧がひらきます

古文単語 現代語訳の誤りを直す ①【こたえ】

名前 _____

高校／印のついた訳を、本文に合う意味に直す　　日付 _____

赤い字がこたえ。「→」は手がかり。正しい訳は同じ意味の言い方なら正解にします（訳は自作）。

1　原文　すさまじき物にして見る人もなき月の、寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心ぼそきものなれ。（徒然草・第十九段）

訳　ものすごいものとして見る人もいない月が、寒々と澄んでいる二十日あまりの空は、心細く感じられるものだ。

正しい訳	原因
興ざめな	**ア**

→ 見る人もいない冬の月の話。恐ろしさでなく「興ざめだ」の意

2　原文　花橘は名にこそおへれ、なほ梅のにほひにぞ、いにしへの事も立ちかへり恋しう思ひ出でらるる。（徒然草・第十九段）

訳　花橘は名で知られているが、やはり梅の美しい色つやによって、昔のことも立ち返って恋しく思い出される。

正しい訳	原因
香り	**イ**

→ 昔を思い出させるのは梅の「にほひ」＝香り。花橘と並べている

3　原文　さるべきゆゑありとも、法師は人にうとくてありなむ。（徒然草・第七十六段）

訳　そうなる運命の理由があっても、法師は人と疎遠でいるのがよいだろう。

正しい訳	原因
適当な（しかるべき）	**イ**

→ 「ゆゑ（理由）」を修飾して、ふさわしい理由という意味

4　原文　花のもとには、ねぢより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては大きなる枝心なく折り取りぬ。（徒然草・第百三十七段）

訳　花の下では、にじり寄ったり立ち寄ったりして、よそ見もせずに守って、酒を飲み、連歌をして、しまいには大きな枝を無分別に折り取ってしまう。

正しい訳	原因
見つめて	**ア**

→ 「あからめもせず（よそ見もせず）」と呼応して、花を見つめている

5　原文　鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る数おほかる日はあれど、送らぬ日はなし。（徒然草・第百三十七段）

訳　鳥部野、舟岡、避けられない野山にも、死者を送る数が多い日はあるが、送らない日はない。

正しい訳	原因
それ以外の（ほかのも可）	**イ**

→ 鳥部野・舟岡と並べて、そのほかの野山と言っている

6　原文　あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。（徒然草・第百五十七段）

訳　あからさまに聖教の一句を見ると、なんとなく前後の文も目に入る。

正しい訳	原因
ほんの少し（ちょっとも可）	**ア**

→ 少し見ただけでも前後の文が目に入る、という流れ

古文単語 現代語訳の誤りを直す ②【こたえ】

高校／訳のどこが、なぜ違うかを見つけて直す

名前 _____

日付 _____

赤い字がこたえ。「→」は手がかり。正しい訳は同じ意味の言い方なら正解にします（訳は自作）。

1 原文　冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。（枕草子・第一段）

訳　冬は努力するのがよい。雪が降っているのは言うまでもない。

誤りの語句	正しい訳	原因
努力する	早朝	ア

→ 春はあけぼの・夏は夜・秋は夕暮れと、時間帯を並べている

2 原文　やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。（徒然草・第三十二段）

訳　まもなく掛け金をかけて奥にこもってしまったならば、残念だっただろう。

誤りの語句	正しい訳	原因
まもなく	すぐに（そのままも可）	ア

→ 客を送り出した直後の動作。時間をおく「まもなく」ではない

3 原文　はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方がた、めざましきものにおとしめ嫉みたまふ。（源氏物語・桐壺）

訳　はじめから自分こそはと自負していらっしゃった方々は、この方をすばらしい者としてさげすみ、ねたみなさる。

誤りの語句	正しい訳	原因
すばらしい	気にくわない（あきれたも可）	イ

→ すぐ後の「おとしめ嫉み（さげすみ、ねたむ）」と合わない

4 原文　「我こそ死なめ。」とて、泣きののしることいと堪へがたげなり。（竹取物語）

訳　「私のほうこそ死んでしまおう」と言って、泣いて悪口を言う様子は、とても耐えがたそうである。

誤りの語句	正しい訳	原因
悪口を言う	大騒ぎする（泣き騒ぐも可）	ア

→ かぐや姫を手放したくない翁が泣く場面。だれかを悪く言ってはいない

5 原文　つれづれなるままに、日ぐらし硯に向ひて、心にうつりゆくよしなしごとを（徒然草・序段）

訳　することがなく退屈なのにまかせて、一日中硯に向かって、心に浮かんでは消えてゆくとりとめもないことを

誤りの語句	正しい訳	原因
なし	—	なし

→ 「つれづれなり」＝することがなく退屈だ。訳は正しい

6 原文　いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。（源氏物語・桐壺）

訳　どの帝の御代であったか、女御や更衣がたくさんお仕えしていらっしゃった中に、それほど高貴な身分ではない方で、際立って胸をときめかせていらっしゃる方がいた。

誤りの語句	正しい訳	原因
胸をときめかせて	帝に寵愛されて（寵愛を受けても可）	ア

→ 女御・更衣は帝に仕える人。その中で際立つのは帝の寵愛

7 原文　花紅葉のおもひも皆忘れて、悲しくいみじく思ひなげかるれど、いかがはせむ。（更級日記）

訳　花や紅葉を楽しむ思いもすっかり忘れて、悲しくすばらしく嘆くけれど、どうしようもない。

誤りの語句	正しい訳	原因
すばらしく	ひどく（はなはだしくも可）	イ

→ 「悲しく」と並べて嘆きの程度を言う。ほめる意味ではない

8 原文　ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。（枕草子・第一段）

訳　ただ一つ二つなどと、かすかに光って飛んでいくのもこっけいだ。

誤りの語句	正しい訳	原因
こっけいだ	趣がある（風情があるも可）	ア

→ 夏の夜の蛍をほめて並べる段。笑える話ではない

古文単語 現代語訳の誤りを直す ③【こたえ】

名前 _____

高校／正しく訳した古語に迷わず、誤りを1か所に絞る　　日付 _____

赤い字がこたえ。「→」は手がかり。正しい訳は同じ意味の言い方なら正解にします（訳は自作）。

1　原文　……ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも、忌ま忌ましうかたじけなくなむ」とのたまふ。（源氏物語・桐壺）

訳　……すばらしい身でございますので、このようにいらっしゃるのも、縁起が悪く恐れ多い」とおっしゃる。

誤りの語句	正しい訳	原因
すばらしい	不吉な	イ

→ 直後の「忌ま忌ましう（縁起が悪い）」が、不吉な身という意味を示す

2　原文　かぐや姫のいふやう、「親ののたまふことを、ひたぶるにいなび申さんことのいとほしさに、得難きものを、かくあさましくもてくること」をねたく思ひ、翁は閨の内しつらひなどす。（竹取物語）

訳　かぐや姫が言うには、「親がおっしゃることを、一途にお断り申し上げるのが気の毒で、手に入れにくい物を、このように驚くほど持ってくること」をねたましく思い、翁は寝室の中の準備などをする。

誤りの語句	正しい訳	原因
ねたましく	いまいましく（腹立たしくも可）	ア

→ 苦労して宝を持ってきた皇子への腹立ち。うらやむ意味の「ねたましい」ではない

3　原文　……唐めいたる装ひはうるはしうこそありけめ、なつかしううらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。（源氏物語・桐壺）

訳　……（楊貴妃の）唐風の装いは親しかっただろうが、（更衣の）親しみやすくかわいらしかったご様子を思い出されると、花の色にも鳥の声にもなぞらえるすべがない。

誤りの語句	正しい訳	原因
親しかった	端正で美しかった（整って美しかったも可）	イ

→ 唐風の装いを、更衣の人柄と対比してほめている。「親しい」ではなく整った美しさ

4　原文　……なべてほだし多かる人の、よろづに諂ひ、望み深きを見て、無下に思ひくたすは、僻事なり。（徒然草・第百四十二段）

訳　……一般に係累の多い人が、何事にもへつらい、望みの深いのを見て、むやみに見下すのは、まちがいである。

誤りの語句	正しい訳	原因
なし	—	なし

→ 「なべて」＝一般に、「ほだし」＝妻子などの係累、「僻事」＝まちがい。訳は正しい

5　原文　わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ続けば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。（源氏物語・桐壺）

訳　わざと行う御学問はもちろんのこと、琴や笛の音を宮中にまで響かせ、すべて言い続けると、大げさで、いやな感じになってしまいそうな御様子であった。

誤りの語句	正しい訳	原因
わざと行う	本格的な（正式なも可）	ア

→ 学問を琴や笛の腕前と並べている。「わざと（故意に）」ではなく、本格的な学問

古文単語 現代語訳の誤りを直す ④【こたえ】

高校／敬語・打消の取り違えにも気づいて直す

名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿

日付 ＿＿＿＿＿＿＿＿

赤い字がこたえ。「→」は手がかり。正しい訳は同じ意味の言い方なら正解にします（訳は自作）。

1 原文　手の悪き人の、憚らず文かきちらすはよし。見苦しとて人に書かするはうるさし。（徒然草・第三十五段）

訳　字の下手な人が、遠慮せず手紙を書き散らすのはよい。見苦しいからといって人に書かせるのは騒がしい。

誤りの語句	正しい訳	原因
騒がしい	不愉快だ（わずらわしい・いやみだも可）	ア

→ 自分で書くのがよい、という流れ。人に書かせるのを「いやみだ」と言っている

2 原文　灌仏のころ、祭のころ、若葉の梢すずしげに繁りゆくほどこそ、世のあはれも人の恋しさもまされと、人のおほせられしこそ、実にさるものなれ。（徒然草・第十九段）

訳　灌仏会の頃、祭の頃、若葉の梢が涼しそうに茂っていく頃は、世のしみじみとした趣も人の恋しさもまさると、ある人が申し上げたのは、実にそのとおりである。

誤りの語句	正しい訳	原因
申し上げた	おっしゃった	ウ

→ 「人の」の動作を高める尊敬の言い方。へりくだる謙譲ではない

3 原文　……太秦にこもりたるに、宮にかたらひ聞ゆる人の御許より文ある。（更級日記）

訳　……太秦にこもっていたところ、宮に説得し申し上げる人のもとから手紙が来る。

誤りの語句	正しい訳	原因
説得し	親しく交際し（親しく付き合いも可）	イ

→ 宮と親しい間柄の人からの手紙。人を説き伏せる話ではない

4 原文　たとへば碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小をすて大につくが如し。（徒然草・第百八十八段）

訳　たとえば碁を打つ人が、一手もむだにして、人に先んじて、小を捨てて大につくようなものだ。

誤りの語句	正しい訳	原因
むだにして	むだにせず（むだにしないでも可）	エ

→ 「せず」は打消。一手もむだにしない、という意味

5 原文　久我の相国は、殿上にて水を召しけるに、……（徒然草・第百段）

訳　久我の相国は、殿上の間で水をいただいたところ、……

誤りの語句	正しい訳	原因
いただいた	お召し上がりになった（お取り寄せになったも可）	ウ

→ 身分の高い人の動作。尊敬の「お召し上がりになる」で、謙譲の「いただく」ではない

6 原文　大社を遷して、めでたく造れり。（徒然草・第二百三十六段）

訳　大社をうつして、すばらしく造ってある。

誤りの語句	正しい訳	原因
なし	―	なし

→ 「めでたし」＝すばらしい。訳は正しい

7 原文　我子の仏変化の人と申しながら、ここら大さまで養ひ奉る志おろかならず。（竹取物語）

訳　我が子は仏の化身の人と申しますが、これほど大きくなるまでお育て申し上げた私の志は、いいかげんである。

誤りの語句	正しい訳	原因
いいかげんである	いいかげんではない（いいかげんでないも可）	エ

→ 「ならず」は打消。志が並々でない、と言っている

古文単語 現代語訳の誤りを直す ⑤【こたえ】

名前 _____

高校／自分の訳を書いてから、訳を点検する　　日付 _____

赤い字がこたえ。自分の訳の欄は一例で、同じ意味の言い方なら正解です。「→」は手がかり（訳は自作）。

1　原文　神楽こそなまめかしく面白けれ。（徒然草・第十六段）

自分の訳（1つ目）	自分の訳（2つ目）
優美だ	趣がある

訳　神楽こそ色っぽく趣深いものである。

誤りの語句	正しい訳	原因
色っぽく	優美で（優美にも可）	ア

→ 神楽の風情をほめる文。色気の話ではなく、優美さの意

2　原文　人のけしきも、夜の火影ぞよきはよく、物いひたる声も、暗くて聞きたる、用意ある、心憎し。（徒然草・第百九十一段）

自分の訳（1つ目）	自分の訳（2つ目）
気配り	奥ゆかしい

訳　人の様子も、夜の灯火の光でこそよいものはよく見え、話す声も、暗がりで聞いているのは、気配りがあって、奥ゆかしい。

誤りの語句	正しい訳	原因
なし	—	なし

→ 「用意」＝気配り、「心憎し」＝奥ゆかしい。訳は正しい

3　原文　月の隈なくあかからむも、はしたなくまばゆかりぬべかりけり。（更級日記）

自分の訳（1つ目）	自分の訳（2つ目）
暗いところがない	きまりが悪い

訳　月が隅々まで明るいのも、そっけなく恥ずかしくなるに違いなかった。

誤りの語句	正しい訳	原因
そっけなく	きまり悪く（きまりが悪くも可）	イ

→ 明るい月夜に姿を見られる場面。「そっけない」ははしたなしの別義で合わない。きまりの悪さ

4　原文　あやしの賤山がつの所作も、いひ出づれば面白く、恐ろしき猪も、臥猪の床といへばやさしくなりぬ。（徒然草・第十四段）

自分の訳（1つ目）	自分の訳（2つ目）
身分が低い	優美だ

訳　身分の低い山里の人の仕事も、話に出して言えば趣深く、恐ろしい猪も、「臥猪の床」と言うと優しくなる。

誤りの語句	正しい訳	原因
優しく	優美に（風雅にも可）	ア

→ 恐ろしい猪も、歌のことばで言えば風雅になるという文。優しい性格の話ではない

5　原文　かしこき御蔭をば頼みきこえながら、落としめ疵を求めたまふ人は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。（源氏物語・桐壺）

自分の訳（1つ目）	自分の訳（2つ目）
恐れ多い	頼りない

訳　恐れ多いお引き立てを頼りに申し上げながら、さげすんで欠点を探しなさる人は多く、わが身は弱々しくちょっとしたありさまで、かえって物思いをなさる。

誤りの語句	正しい訳	原因
ちょっとした	頼りない	イ

→ 「か弱く」と並べて頼りなさを言う。「ちょっとした」の意味では合わない